

各地方に於ける棕平虹 A 型の俗稱

棕 平 廣 吉

1918年五月19日、私が丹後半島の上空に棕平虹（一名地震前兆虹）を發見し、それ以後現在まで23年間に、各地に旅行し研究觀測した結果、丹後半島、富山灣、大阪灣、紀州沖、廣島灣、伊豆半島、志摩半島沖の7ヶ所に發見し、1919年に「棕平虹 A 型」を丹後半島に目撃、その研究を現在まで續けてゐるが、私はこの A 型は氣象變化に關係あるものと推察する。それ以後、我が國各地方に現はれるや否やと調査した處、下記の地方に目撃され、同虹異名稱されてゐるので、茲にその現象狀態を記述すると、大體次の通りである。（尙、棕平虹には本虹1號、後虹 A 型、B 型第1號、B 型第2號の4種あることを附言する。

- (1) 奈良縣添上郡平和村倉中橋次郎氏の話によると、同地方では『サルツポ虹』といひ、夏季の正午より日没前後に多く現はれ、色は7色で鮮明、短弧形で、猿の尻尾の如き形狀をなし、雨天の20時間前位に現はれる。
- (2) 和歌山縣西牟婁郡田邊町字湊磯部落の漁者の話、同郡下芳養村字松原部落の漁者の話によると『コヒ』と云つて、漢字で書くと『小火』または、『小虹』ともいはれ、1年を通じて沖風の晴天に多く現はれ、形により『上リコヒ』『下リコヒ』『ウケコヒ』『ハサミコヒ』『タツコヒ』『ヨココヒ』と名付けられる。形は極く短く、色は鮮明なる場合と薄淡き場合とあり、シケの前兆といはれる。但し日出前後、日中、日没前後に現はれる特殊な『コヒ』にかぎり『マコヒ』（眞小虹）といふ。
- (3) 静岡縣伊豆半島篠海町附近では『ヒルハナビ』といひ、晝間の晴天に現はれ約10分間位で消失する。色は紫と赤が濃く、その形は名の如く火花に似て居り、太陽の位置には關係しない。
- (4) 廣島市附近の漁夫は『神火』^{カミビ}といひ、短い形の虹で高い晴天に美しい7色の弧狀を現はし、冬の朝に多い。
- (5) 京都府下丹後半島の漁者は『ヒノコ』（火の粉）または『龍宮の使ひ』といひ、年中『イセチケ』の天候に現はれ、種類は形によりて異り、『ウケヒノコ』『玉手箱』『西ヒノコ』と名付けてゐる。太陽の位置には關係なく、午前7時より午前10時までと、午後3時より午後5時までに多く現はれる。昔の傳説に曰く、

丹後國本庄村の浦島神社に毎朝參詣する農夫あり、歸る途、同村の沖合に玉手箱の

形をした色づきの雲を見て驚いたといふ。同神社に奉納されたる玉手箱を見ること
が出来ぬため、神様が宙に寫し給ふたのであると信じ、家に歸るや、家族に話した。
それ以後東南風の景色模様となると、度々見たので、かの農夫信仰家は『玉手
箱』と名付けた。附近の人々も度々見た。

- (6) 富山縣魚津町附近では『神帶』^{カミオビ}といひ、小寒、大寒の時期によく見られる。
色は5色位に見え、春は蜃氣樓のある景色によく觀測せられる。
- (7) 三重縣志摩半島波切村附近の漁者の話によると、『コヒ』といひ、天候が崩
れる前日によく見られる。朝は8時より10時まで、午後は8時前後に多い。色
は淡い場合と濃い場合があるが、夏季は淡く、冬は濃い。同地方の俚諺では

朝日にコヒとりやその日のならひ

夕日にコヒとりやこの日のならひ

といひ、朝此のコヒが現はれたら、その日1日中は朝の天候通りで續き、夕
日に現はれたら、その翌日も午前中は同じ天候が續くといふことである。

- (8) 福井縣小濱町附近の漁者の話によると、『ヒノコ』といひ、沖風(北能登より
吹く風)によく現はれる。色は美しくて形は短かく、約10分乃至20分間で
消えてしまふ。
- (9) 長崎縣五島附近では『シケのおつげ』といひ、悪化する天候の2~3日前に
かぎり晴天の上空に現はれる。太陽の位置には關係なく、5~6分間で消失し
て、亦、1時間位してから現はれ、2~3分間で消える。
- (10) 沖縄縣では『テンニヂ』といひ、春より九月上旬頃の颱風が襲ふ前日に
現はれ、10分間位で消え、色は美しい。晴天に多く、形は水蒸氣虹の一部分
の如きもので長さ3~4尺、幅1尺位に見える。(完)

(1941年十二月5日稿)

書物を譲る

國際天文同盟の輯報 Transactions of the International¹ Astronomical
Union 第6卷一冊(1938年八月、ストックホルム會議の完全記録で、現代の
世界天文學界總覽として、最も權威あるもの)

ハーバード天文臺發行の回報 Circulars 及びブレテン Bulletins 數百號(主
として、天體物理學上の研究報告)

上記のもの、希望者は往復ハガキを以つて本會事務局に詳細を聞き合はされたし。